

## 公平について 津守真

どの子どもにも公平にするということは、教育の実際上の原則であろう。保育者は、常日ごろ、このことを心得ているであろうし、自分ほどの子どもにも、不公平にはしていないと思っていることが多いだろうと思う。

ところが、ある時、ある機会に、子どものふとしたことばなどから、自分はおもしろい、公平さを欠いていたのではないかと気付かされることがある。手がかからない、自分でやってゆける子どもだからと思ひ、その子を信用しているつもりで、積極的にふれることの少なかつた子どもが、保育者のことを不公平だと思つていたりする。他の子どもには親切にして、可愛がるのに、自分だけ別扱いにされていると感してひがんでいたりする。保育者は、そういうときに、がく然として自らをふりかえる。

そういえば、手のかかる子どもや、要求の多い子ども、保育者から見て問題の多い子どもには、よく相手もし、ことばをかけ、目をかけることが多かった。しかし、おとなしくて、全体を乱すことの少ない子どもには、声をかけることも少なかつた。具体的な行動の上では、決して公平にはいかなかったことに気が付

く。そして、その気になって、その子どもにつき合うことを多くしてゆくと、その子どもとの人間関係を回復し、いままで見のがしていた意外な面を見いだすのである。手がかかることが少なかつたというのは保育者との間のことであつて、他のところでは、もっと荒れた面を出していたのかもしれない。そのことに気付かないで、公平にしていたと思つていた自分は、自分の公平さを主張して、子どもの片面しか見ていなかったことになる。

実際には、人間はだれにでも公平にすることは不可能な存在であると思う。むしろ、公平にできないところにこそ、人間生活が成り立っているともいえる。

それでは、保育者は、子どもたちに対して不公平にしてよいのかというと、決してそうではない。できるだけ、どの子どもにも、ひとしく時間と労力と心をさくことをつとめることが必要である。公平であることができないのが、自分の現実であることを認めた上で、公平であることをつとめるのである。

意識の上で、自分はどの子どもにも公平にしていると思ひこむことはやさしい、しかし具体的な行動をよく見れば、公平でないのが自分の現実である。その認識から出発するとき、どの子どもにもふさわしい公平さを作り出してゆくことができてゆくのではないだろうか。